



少年院・留置場・物置所・刑務所内でも面接可能!
全社身元引受可能、社宅・寮完備!
新規2社を含む全24社掲載!!

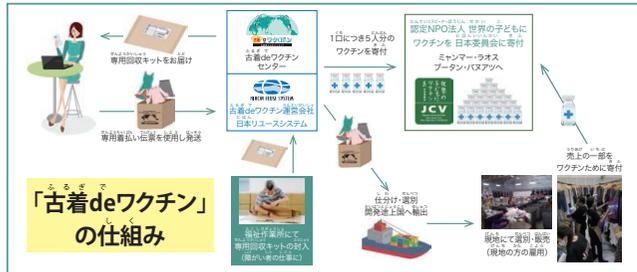
インタビュー
お笑い芸人
千原せいじさん

特筆
「自立準備ホーム新川 止まり木」代表
大塩幸子さん

古着deワクチンで社会貢献

日本リユースシステム株式会社

最近、よく耳にするSDGs。国連で定められた持続可能な開発目標のことで、世界中で様々な取り組みがなされているが、中でも日本リユースシステム株式会社が行っている「古着deワクチン」は一石何鳥にもなる、画期的な取り組みだ。しかも、関わった人たちが喜び、笑顔になるのだという。どんな仕組みなのか、担当者に聞いた。



家庭や会社で不要になった衣類やバッグ、靴、服飾雑貨などを、専用回収キット(3,300円/税込)を購入して送ってもらう。すると1口につき、5人分のポリオワクチンが開発途上国の子どもたちに寄付される。集まった衣類などは主にカンボジアを中心に開発途上国へ輸出され、現地で販売される。カンボジアの直営店舗で販売に当たるのは、ポリオの後遺症がある人や障がい者、かつてストリートチルドレンで経済的に自立を自指す若者などだ。

これまでの成果

合計 3,850,571 人分
ワクチンを寄付させていただきました

合計 32,254,900 着分
衣類を再利用させていただきました



2019年に第3回ジャパン・SDGsアワード「SDGs(パートナーシップ貢献(特別賞))」を受賞。賞状授与で開会された表彰式。(撮影:日本リユースシステム株式会社)

掲載事業誌7実録 2022.1.31現在

皆が笑顔になる理由

衣類を送ってくれた人からは「家がスッキリ片づくだけでなく、社会貢献もできた」と感謝の手紙が届く。これまで支援される側だった障がい者などが働く場を得て、社会の一員としての自尊心を持って。衣類はゴミにされることなくリユースできる。ポリオワクチンでたくさんの子どもの命が守られる。まさに、いいことづくめだ。

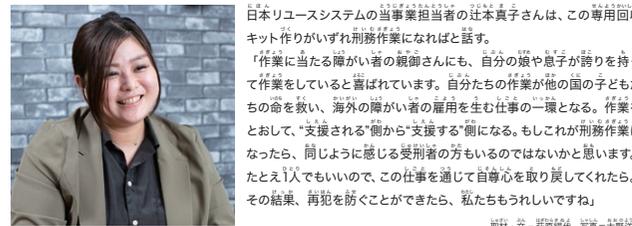
いつの日か刑務作業にも

誇りを持ってキット作り

衣類を入れて送ってもらう専用回収キットは6つの福祉作業所に依頼して、毎月1万5000個を製造している。その1つである「梅の木の家共同作業所」を訪ねた。30代から70代までの精神障がい者10人あまりが、それぞれのペースで作業をしている。特別な紙でできた大きな強化袋を小さく折りたたみ、チラシと一緒に箱に詰めたら専用回収キットの完成だ。手際よく作業を進める花房さんは73歳。3年前から手掛けているキット作りの感想を教えてください。「折られたむ時に力を使うので大変ですが、スポーツをやっているみたいで楽しいですよ。衣食住の1つである衣類を、開発途上国で日本の質の高い衣類を喜んでくれる人たちに届ける。そういう仕事に携われることは名誉なことだし、誇りに思っています」



支援される側から支援する側に



日本リユースシステムの当事業担当者の辻本真子さんは、この専用回収キット作りが「いつか刑務作業になれば」と話す。「作業に当たる障がい者の親御さんにも、自分の娘や息子が誇りを持って作業していると喜ばれています。自分たちの作業が他の国の子どもたちの命を救い、海外の障がい者の雇用を生む仕事の一環となる。作業をとおして、「支援される側から支援する側になる。もしこれが刑務作業になったら、同じように感じる受刑者の方もいるのではないかと思います。たとえ1人でもいいので、この仕事を通じて自尊心を取り戻してくれら。その結果、再犯を防ぐことができれば、私たちがもううれしいですね」

取材・文=萩原裕代 写真=大野洋介